

## 横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

澤 護

横須賀製鉄所は、幕府がフランスに依頼して建設したもので、その設立は元治元年（1864）11月をもって濫觴とする。これが明治維新に際して、明治元年閏四月に旧幕府より新政府（神奈川県）に収容された。次いで、明治2年10月27日に横浜製鉄所と共に民部・大蔵省の所管となり、明治3年7月13日に民部省の独轄となった。

明治4年4月7日、政府は横須賀製鉄所を横須賀造船所と改称し、横浜製鉄所は横浜製作所とあわせて改称し、工部省の管轄とした。翌5年10月8日、これらの造船所・製作所は工部省より海軍省に転属し、長い間海軍省の所管にあった。その後、横須賀造船所は、後に横須賀海軍工廠（明治36年設置）として発展していくことになった。

黎明期に来日したフランス人技師の基本資料は、『横須賀造船史』『横須賀海軍船廠史』『大隈文書』（A 2985, A 2986, A 3024, A 3027等）であるが、これらの資料の最大の欠点は、フランス人技師の氏名が片仮名と平仮名でしか記載されてなく、原綴りが一切不明というところにあった。このため、これら製鉄所で雇用された人数も正確に把握されず、お雇い外国人関係としては未開拓のまま残されていた。

本稿はいまだ調査過程の未定稿ではあるが、これまでの調査結果を発表することにした。原綴りに関しては、横浜で発行されていた欧字新聞、香港で刊行の『China Directory』と『Chronicle & Directory』、横浜で発行の『Japan Gazette Hong List & Directory』等を参考にしたが、「ディレクトリー」に関しては1861年版以降、1863年版を除き、各年度

のものを確認し終っている。あとは、フランスに残されている資料の調査・分析だが、これはなお長い年月を要するものと思われる。

日本の政治の混乱期を経て成長していった製鉄所の変遷、各フランス人技師の履歴など興味深い研究課題は幾多もあるが、本稿はこれら技師の原綴りの解明と、来日・帰国日の調査に重点をおいたものである。これらの事柄に関しては、「明細表」の中に記述しておいたが、これまでの調査の過程で疑問に感じたこと、表中で記載できなかった点を以下に若干触れておきたい。

乗船名簿からも多くを調査できたが、1866年の一部、1870年の一年分が完全に手元の資料では欠けているため、この年度の調査は今後の資料の発見に期待をかけている。

### 横浜製鉄所（製作所）

横須賀・横浜製鉄所関係で、始めてフランス人が雇い入れられたのは慶応元年正月のことで、ウエットというフランスの軍艦「セミラミス」号（*Sémiramis*）の乗組員であった。彼は、明治2年12月、横浜製鉄所に雇用されていた12名の内のひとりであったが、翌年正月に横須賀製鉄所に継雇いされることになった。だが、この年の11月8日に横須賀で病死し、横浜の外人墓地に埋葬されたことになっているが、現在のところ彼の墓碑は確認されていない。

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技術者は、慶応2年より明治9年までの間に、10名が犠牲になっているが（明治7年3月の伊豆沖の海難事故により水死したリッショーニを加えると11名）、これら10名に関しては横浜外人墓地の埋葬者台帳に名前が掲載されてなく、また墓碑もみつかっていない。

犠牲者はつぎの通りである。（没年 月 日）

・レノウ（慶応2年2月28日）

- ・ゲルトラン（明治元年3月24日）
- ・リュシャーニ（明治3年10月26日）
- ・ウエット（明治3年11月8日）
- ・ビラール（明治3年11月9日）
- ・サヴァチエ（明治4年1月5日）
- ・エルミット（明治4年10月3日）
- ・ルガール（明治5年7月19日）
- ・アंकティル（明治5年9月9日）
- ・エリソン（明治7年9月28日）

以上10名はまず間違いなく横浜外人墓地に埋葬されたことは、状況からみてまず間違いはない。下記の3名のうち、バスチャンとサルダーの碑は同墓地にあり、リッショーニの碑は伊豆の入間村（静岡県加茂郡南伊豆町）に、フランス郵船「ニール号」遭難者慰霊塔とともに、同地の海蔵寺にある。

- ・リッショーニ（明治7年3月21日）
- ・バスチャン（明治21年9月9日）
- ・サルダー（明治38年4月2日）

横浜外人墓地は、1923年の関東大震災によって決定的な損害を受けただけに、これら10名の碑の確認は絶望的といった実感がする。なお、ウエットと表記されている氏名の原綴りは、Huetと思われる。

ウエットに次で雇用されたのは、やはりフランスの軍艦「ケリエル」号の乗組員で海軍武器掛のマルタンだが、彼は横浜製鉄所の警査掛として雇い入れられた。しかし、慶応2年10月調べの「仏人明細表<sup>1)</sup>」では、横浜製鉄所ではなく横須賀製鉄所の雇いとなっているので、早い時期に組み換えられたのであろう。

マルタンの月給は、慶応3年9月4日に70ドル、明治元年2月8日に80ドル、明治4年に95ドルとそれぞれ増給されている。満期帰国は明治

5年4月30日だが、この日は西歴の1872年6月5日に当たり、彼が横浜からフランス郵船「ヴォルガ」号に乗船して帰国した日をもって満期解雇という形がとられている。

初代の横浜製鉄所の首長となったドロートルは、「仏国海軍士官<sup>2)</sup>」の背書があるだけに、先の二人と同様にフランス軍艦の乗組員だったと推定される。ドロートルの契約期間は1年6カ月で、この間に横浜製鉄所の設立・完成を義務づけられた。彼は慶応元年2月に艦材に関する意見書を上申したが、この署名に「エル、ドロートル<sup>3)</sup>」とあるだけで、いまだ氏名の原綴りは不明のまま残されている。

ドロートルは慶応元年の8、9月頃に工材購入のため上海に赴いているので、乗船名簿から調査をしてみたが、都合のよい名前は浮び上ってこない。おそらく、表で示したド・ロトゥールがその人であろう。

また、解雇日も明確でなく、なんとも記述のしようがないが、二代目の横浜製鉄所首長となったゴートランは、慶応2年9月に横須賀より横浜に出張しているので、ドロートルの解雇は慶応2年8月末日だったと推定される。

メーグルの月給は、明治元年3月9日に5ドル増給され80ドルとなり、翌2年に85ドル、3年95ドル、4年100ドルと増加された。この点は別表の中には書き切れなかったので、表を利用する方は含んでおいて戴きたい。なお、明治4年11月5日に「メーグルノ満期解雇ヲ認可<sup>4)</sup>」との記録があるが、明治5年2月24日が正しいと考えられる<sup>5)</sup>。彼は翌25日(1872.4.2)出航のフランス郵船にて帰国の途についたと判断される。

表で示したエチゴアンよりアンジャポールまでの6名は、慶応2年10月調べの「横浜製鉄所雇仏人略表<sup>6)</sup>」に名前があるが、明治元年の表にはない人たちである。雇用期間も原綴りも一切不明で、調査は進展しない。おそらく、横浜港に停泊していたフランス軍艦の乗組員で、製鉄所が軌道に乗るまでの短期間雇用されたものであろう。

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

医師セルールに関しては、明治4年12月12日調べの「明細表<sup>7)</sup>」にでてくるだけで、他に記録はない。彼は横浜居留地9番のフランス病院の医師だったが、明治初年の居留外人人名録には名前は掲載されていない。

横浜居留地9番のフランス病院が、居留外人人名録ともいべき『ディレクトリー』に掲載されたのは1868年版からで、これらの版にセルールの名はない。

セルールが雇用された1カ月後にプギーが雇われているのをみると、セルールは極く短期間の月雇いだったことを窺がわせる。プギーは実はプギーで、彼もまた横浜フランス病院の医師であった。プギーは明治3年中に帰国したものと推定される。

バリコーは、慶応2年より明治3年まで横浜製鉄所首長であったアンドレ・ルッサンの後任が来るまでの間臨時に雇われたもので、その雇入期間は明治3年1月30日（3. 3. 2雇いとの記録もあり）より同年9月5日までの短期間であった。

アンドレ・ルッサンはパリの初代日本領事フルリー・エラルの斡旋によって来日することになったが、明治2年の首長ヴェルニーより寺島陶蔵宛ての上申には、「変革スベキ職務」とか「職務ノ改革ヲ要ス」とあって、必ずしもヴェルニーが彼を評価していなかったようである。そのためか、ルッサンの雇用期間は一般の4年ではなく、3年でしかなかった。

それでも、明治29年3月9日にはヴァンサン・フロランと共に勲四等旭日小綬章を受けている。因に、数多い横須賀・横浜製鉄所雇いのフランス人で勲章を受章した人たちは、わずか8名でしかなかった。

なお、アンドレ・ルッサンには、帰国後に刊行した『日本沿岸の海戦』（邦訳は、『幕末海戦記』）という書がある。

エムテールの雇い止めの明治5年12月17日であるが、明治5年12月は2日までしかなく、明治5年12月3日は明治6年1月1日と西暦と合致した日であるので、この記録の5年12月17日は、明治6年1月15日

と読み換えなければならない。このような例は、横須賀製鉄所雇いの雇入期間でもみられることだけに注意をしておきたい。

横浜製鉄所のフランス人技術者は、慶応2年10月に横須賀から出張を命じられた者をも含めて16名であったが、明治5年12月には5名、明治9年には1名と減少している。

元来、横浜製鉄所は横須賀製鉄所の予備機関の性格で、フランス人技師の動向をみるとさほど重要視されていないのがわかる。

横浜製鉄所の設立・就業は横須賀製鉄所よりも早い慶応元年2月のことで、その場所は横浜本村（現、根岸線石川町駅付近で、一時期ここに碑があった）の大岡川と谷戸川の岸辺であった。ここでの目的は、まず横須賀製鉄所の建設が迅速にとり行なわれるよう、資材の製造にあっただけに、横須賀製鉄所が完全に機能を発揮するようになるにつれて、横浜製鉄所が衰退の途をたどるのも当初から予想されていたことであった。

事実、横浜製鉄所の簡単な変遷をみるだけでも、それがよく理解される。明治4年4月7日に横浜製作所と改称して工部省の所轄となった後、5年10月8日に転属して海軍省の所属となり、明治6年12月22日に「海軍省ハ横浜製造所ヲ大蔵省ニ交付シ……雇<sup>8)</sup>人等ヲ譲与」した。つまり、横浜製鉄所（製作所）は明治6年12月以降は大蔵省駅通寮に属したわけであるが、駅通寮はこれを郵便汽船会社に貸し、同社が解散すると三菱郵船会社に転貸し、さらに神奈川県の高島嘉右衛門、長崎県の杉山徳三郎、大浦慶子の3名に連貸した。明治9年1月22日のことである。

駅通寮（局）が内務省の所属となると、横浜製鉄所（製作所）も自動的に内務省に属することになったが、明治11年10月25日に再び内務省より海軍省の所轄するところとなり、新しい体制の基に同年11月1日より同製鉄所は始業した。しかし、明治13年1月1日より同22年12月31日までの10年間は東京府の平野富二に貸与されることになり、横浜製鉄所は事実上政府の手を離れることになった。

郵便汽船会社、三菱郵船会社、高島嘉右衛門、平野富二と横浜製作所の関係、その裏にあった各省や政府役人の葛藤は、明治新政府の推移を知る上でも重要な問題点である。

### 横須賀製鉄所（造船所）

幕末期におけるフランス人技師の雇用日は、フランスにおいて首長ヴェルニーが人選し契約をした日か、彼らのフランス出立の日をもって当てられ、当初の雇用期間は4年であった。このため、これら技師の日本到着は雇用時よりも相当遅れる結果になっている。

横浜港に入港した船から、フランス人技師の来日を探ってみることにするが、これにより、従来の誤謬が相当正せるものになると思われる。

- ・ 1866. 3. 12 フランス郵船「デュプレックス号」にて横浜入港。<sup>9)</sup>  
レノウ、デュモン、バスチャンの3名。

上記3名は、1866年1月19日に訪仏中の柴田日向守剛中らと共にマルセイユを発ち、途中スエズ、香港、上海で船を乗り継いで来日した第一陣である。先ず、土木・建築関係の者が最も早く来日することになったのは、横須賀製鉄所の建設上、最優先されなければならなかったからである。

彼ら3人は約1週間横浜に滞留し、1866年3月20日に横浜製鉄所のマルタンと共に横須賀入りをはたした。同年3月23日に早速にも工事に着手したが、この日がフランス人技師の工事着手の日であった。しかしながら、その日から3週間後の4月13日にレノウは、横浜出張中に病気にかかり、横浜にあったフランス病院に入院したまま帰らぬ人となった。横須賀製鉄所の最初の犠牲者であった。

- ・ 1866. 6. 8 「モンゴリヤ」号にて来日。<sup>10)</sup>

ヴェルニー、メラング、モンゴルフィエ、リッショーニ、ボエルの5名。

この5名の来日に関しては、慶応2年5月5日横浜着との記録もある。<sup>11)</sup>この方の記録が正しければ、1866年6月8日は10日ほど遅い同年6月17日になる可能性がある。「(慶応2年) 四月二十五日首長ヴェルニーハ横須賀渡航手續ニ據リ三月五日迄ニ落成セシ工作機械ト(一部略) 共ニ帆船「モンゴリヤ」号ニ塔ジテマルセイユ港ヲ発シ(一部略) 此日横浜ニ着<sup>12)</sup>」との記録は、はたして信頼できるのかとの疑問がある。少なくとも、1866年6月中に横浜入港した船に「モンゴリヤ」号なる船はない。慶応2年3月5日迄にでき上った機材を積み、4月25日に帆船が横浜に着くことは絶対にできない。50日の航海日数は、マルセイユ・横浜間の当時の最も短い日数で、これであればアレキサンドリヤよりスエズまで陸路を利用し、香港と上海とで船を乗り継いで来日するものでなければ、とても実現できるものではない。帆船「モンゴリヤ」号は、実は「モンゴル」号(Mongol)のことで、この船であれば後述するように、1866年11月9日に横浜に入港している。おそらく、この船と混同したものであろう。50日ほどの航海日数で来日したとすれば、定期船を利用する以外に方法はない。フランス人技師を大勢契約し、最も早く来日しなければならなかった首長ヴェルニーが、帆船に乗って延々と希望峰を回って来日する時間的なゆとりがあるはずなどない。結論を先にいえば、ヴェルニーらの来日は、1866年6月8日のことで、船はフランス郵船の「デュプレックス」号だったと判断したい。これなら、慶応2年4月25日着との記録とも一致する。しかしながら、この船の乗船名簿は未だみつからない。ヴェルニーは第2代駐日公使レオン・ロッシュの斡施により、慶応元年正月に上海より来日し、横須賀製鉄所設立案の会議に参加しているので再来日ということになる。彼は造船・砲艦製造の専門家であったが、横須賀に学校(黌舎)を建て、日本人青少年の教育、人材養成にも努めた。後年、フランス語の分野で活躍する多くの日本



人が、この学校から出たことも見逃してはならないであろう。

- ・ 1866. 7. 13 来日。船名不明。

メルシェ, サヴァティエ, ゴートラン, ジョフレー, ギルマンの5名

来日した折の郵船の資料が若干不足しているが、日付からみてフランス郵船の「デュプレックス」号だったと判断される。製図長, 医師, 工事課長といった人たちだけに、ジョフレーを除く4名は妻を伴っての来日であった。なお、サヴァティエは娘をひとり連れていたが、明治9年1月18日に帰国した時には、子供は2人に増えていた。

- ・ 1866. 10. 2 「ジョアンヌ・マリー」号にて来日。

デニエル, マンジュ, ダビス, レオステイク, ポン, コルデネー, スーデ, コンスタンタン, ペリコーの9名。

「ジョアンヌ・マリー」号 (Johanne Marie) は帆船で、ヴェルニーが製鉄所機械類の運搬用にチャーターしたもので、1866年4月16日にマルセイユを出航し、横須賀に向った船であったが、実に半年にも及ぶ航海だったわけである。10月2日に入港した時の記録には「ジョアンナ・マリア」 (Johanna Maria) とあるが、「ジョアンヌ・マリー」が正しいと思われる。「ジョアンヌ・マリー」号は、686トンのブレーメンのクリッパー船で、1869年1月29日に横浜居留地92番のグチョー商会 (Gutschow & Co.) の手でニュー・ヨークに向け出航することになるが、この時の記録や連日掲載されていた新聞広告は、いずれも「ジョアンヌ・マリー」とある。

- ・ 1866. 11. 9 「モンゴル」号にて来日。

「モンゴル」号 (Mongol) で来日したフランス人技師の氏名はなく、ただ「21 workmen for the Dockyard<sup>13)</sup>」と書かれているにすぎない。しかしながら、慶応2年2月16日および同年3月1日雇いの大半の技師が、この船で来日したことはまず間違いはないと判断してよいであろう。「大隈文書」や他の資料で解明できた者には、表の摘要

欄で記載しておいた。疑問符のある者は確認はできていないが、雇用日から推定して間違いがないと判断される者である。ただ、表では16名しか推定できないので、ハレル、ルエラーなども同乗していたかも知れない。この2名を加えると18名。なお、「モンゴル」号は1866年5月17日にル・アールを出航したもので、11月9日に横浜入港したあと、翌年4月中旬まで横浜港に繋がれたままであった。

・1866. 11. 13「デュプレックス」号にて来日。ルイ・フローラン。

慶応2年9月12日に仮雇となったデスパーギュの来日は不明だが、先の「モンゴル」号での可能性はありうる。それは、首長ヴェルニーが「雇  
仏人ノ（慶応2年10月）三日ヲ以テ総員皆着セシ<sup>14)</sup>」として提出した「横  
須賀製鉄所雇仏人明細表」をみると総員43名とあり、表で示したヴェル  
ニーよりデスパーギュまでの数と一致するからである（小使のドレルは日  
本在留の者を雇用したものであろう）。

アンジェリニー以下の技師からは、来日して横須賀着をもって雇用日としたのが通例だったと考えられる。これは来日した日と雇用日をみれば理解されることであり、明治2年3月に首長ヴェルニーが寺島陶蔵に提出した「雇仏人條約改正ノ意見」の一項「新雇者ハ航海中其俸給ノ半額ヲ給シ  
横須賀到着ノ日ヨリ其全額ヲ給スベシ<sup>15)</sup>」と明文化されているところに合致する。

フランス人に限らず、お雇い外国人の雇用日は、まず圧倒的に郵船の横浜到着をもってなされているだけに、慶応年間に雇った横須賀製鉄所のフランス人技師のように、フランスでの契約日をもって雇用日としたやり方は、極めて異例のことであった。

明治2年9月28日雇いのデュボアに関しては、同年10月7日、元年12月30日雇いの記録があるが、確認できていない。1869年5月12日、首長ヴェルニーは10カ月の休暇をとり妻と共に一時日本を離れたが、こ

の帰仏中に8名の技師を選定することも帰仏の条件に含まれていた。この8名とは、表で示したジラルよりルガルまでの6名と横浜製鉄所雇いのエムテールの7名は間違いがなく、デュボアを加えると8名と数の上では都合がよい。したがって、デュボアの雇用日は明治2年10月7日が最も信憑性が強い。この日はヴェルニーと契約を交した日で、彼らの来日は明治3年2月か3月と推定される。少なくとも、明治2年中のフランス郵船の乗船名簿には、彼らの名前をみつけたことはできない。

明治4年以降の雇用技師については、日本在留の者を除いてはおおむね調査できたが、いずれも来日（または、横須賀着）した日をもって雇用している。

表をみただけでは、疑問に感じられる人物の雇用関係を若干触れておきたい。慶応元年12月雇いのリッショーニは、明治3年4月に結婚のため片道の船賃を日本側より借り受けて、一時帰国をした。しかし、結婚した形跡はなく、明治6年10月28日に満期帰国をした時の船客名簿<sup>16)</sup>には夫人の名はない。明治7年3月21日死亡の記載は、再雇いの契約をして来日途中に、伊豆沖で嵐に巻き込まれ遭難沈没したフランス郵船「ニール」号で溺死した日である。後日、海軍省は彼を追悼し、遺族に金二百弗を贈与したのであった。

慶応2年2月に雇われたシャペーの期限切れは、明治6年4月であったにもかかわらず、同年1月と3カ月も早く解雇された理由は、この1月22日に彼の居室より失火したため責任をとらされてのものであった。

先に触れたように、横須賀製鉄所関係のフランス人技師の墓は、バスチャンとサルダーのものが横浜外人墓地にある。この内、バスチャンに関しては既に記述したことがある<sup>17)</sup>。サルダーは製鉄所を解雇されたあと、約半年東京大学の理数学教師をし、次で三菱会社に雇われ、横浜で設計事務所を開き、長い間横浜に留まった。この間、フランス領事館（現フランス山）、グランド・ホテル、指路教会など多くの建築設計にたずさわり、ま

た横浜の近代的な水道工事に関する進言を行なっている。サルダーについては、かなり意識的に調査してきたので、いずれ別の機会に彼の業績を言及できるのである。

明治13年5月14日に帰国した建築長・ジュウエットを最後に、横須賀製鉄所（造船所）から全てフランス人は姿を消した。慶応年間より明治13年までの間、ここで働いたお雇いフランス人は92名を数えた（表では93名いるが、エリソンとルヘルソンは同一人物）。

明治5年に陸軍省に雇われ、軍楽を教えたラッパ手のダグロンが、明治11年に海軍でも教えているので、この人物とベルタン以下2名を加えると総員96名となる。

横浜製鉄所のお雇いフランス人は合計21名であった。もっとも、初めに横須賀で雇われ、横浜に一時転属した者が6名いるので、これらの人員を加えて年度毎の表を作製すれば、若干の差が生じるが、表では最初に雇用された製鉄所の方に氏名は記載してある。

両製鉄所で雇用されたフランス人技師の合計は117名にも昇り、陸軍省雇いのフランス人77（78）<sup>18)</sup>名を遙かにしのいだ数であった。

これら多勢のお雇いフランス人のうち、製鉄所関係では、ヴェルニー、サヴァティエ、フローラン兄弟、ベルタン、バスチャン、リッショーニのわずか7人が、かろうじて論文等で取り上げられているにすぎない。各人の略歴、業績等の調査は、これからといった段階にある。

なお、両製鉄所雇用のフランス人に対しては、円ではなくドル（元）で支払われている。このドルは洋銀で、当時最も銀の含有量が豊富なメキシコ・ドルであった。明治6年7月24日に来日したブルトニエール、ダビス（ダビール）の支払いを、日本の金貨にするか洋銀にするかで問題が起こったことがあった。金貨であれば、国外に通用する洋銀と交換しなければならず、また明治6年当時の洋銀1ドルは金貨1円3銭か1円4銭が相場であったから、彼らとしては洋銀での支給を求めたのは当然であっ

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

た。幕末・明治期 1 ドル 1 円であったものが、明治も後半になると 1 ドル 2 円と倍になっていったが、この貨幣価値の変動も、お雇い外国人を追求している者にとっては関心を持っている必要がある。

横須賀造船所で建造した軍艦や船舶、生野銀山等の採鉱機械、明治 2 年 1 月 1 日をもって点灯された我国最初の観音崎灯台をはじめ数々の灯台の歴史、フランス語学校「黌舎」など、フランス人技師と日本との関わりは実に幅が広く、それだけに大勢の研究者の手によって調査されていかなければならない。そのほんのわずかの手懸りでもなればと考えて発表したのが、この「明細表」である。

付 記

横須賀製鉄所にいたフランス人技師についての論文には下記のものがある。

・ヴェルニー

高橋邦太郎「フランソア・ベルニー」(『お雇い外国人⑥ 軍事』 S 43)

・サヴァティエ

今井忠宗「植物家仏医サヴァティエ氏の事蹟」(『植物研究雑誌』 1 - 9, T 6)

上野益三「ポール・サバチエ」(『お雇い外国人③ 自然科学』 S 43)

富田 仁「ポール・サヴァティエー横須賀製鉄所のフランス人医官一」(『仏蘭西学研究』 第 10 号 S 55)

・フロラン兄弟

富田 仁「横須賀製鉄所建築課長フローラン兄弟」(『仏蘭西学研究』 第 8 号 S 53)

西堀 昭「元横須賀製鉄所(造船所)技師ルイ・フェリックス・フロランとヴァンサン・クレマン・フロランについて」(『仏蘭西学研究』 第 9 号 S 54)

西堀 昭「ルイ・フェリックス・フロラン」

〃 〃 「ヴァンサン・クレマン・フロラン」

(『日仏文化交流史の研究』 S 56)

・ベルタン

高橋邦太郎「ルイ・エミール・ベルタン」

(『お雇い外国人⑥ 軍事』 S 43)

西堀 昭「ルイ・エミール・ベルタン」

(『日仏文化交流史の研究』 S 56)

・バスチャン

村松貞次郎「富岡製紙場の建築とバスチャン」(『科学史研究』53号, S 35)

富田 仁「建築技師—エドモン・バスチャン」(『永遠のジャポン』 S 56)

澤 護「富岡製糸場のお雇いフランス人」

(『千葉敬愛経済大学研究論集』第20号, S 56)

・リッシーニ

澤 護「フランス郵船ニール号遭難」(『仏蘭西学研究』第9号 S 54)

富田 仁「ニール号沈没—アントワヌ・リッシーニの死—」(『永遠のジャポン』 S 56)

注 1) 『横須賀海軍船廠史』第1巻, 75-78頁。

2) 同上 22頁。

3) 同上 34頁。

4) 同上 186頁。

5) 「大隈文書」(A 3024)。

6) 『横須賀海軍船廠史』第1巻, 78頁。

7) 同上 190頁。

8) 同上 第2巻, 1頁。

9) “The Japan Times”1866. 3. 16号。

10) 『横須賀海軍船廠史』第1巻, 63頁。

11) 「大隈文書」(A 3024)。

12) 『横須賀海軍船廠史』第1巻, 63頁。

13) “The Daily Japan Herald”1866. 11. 9号。

14) 『横須賀海軍船廠史』第1巻, 75頁。

15) 同上。130頁。

16) “The Japan Weekly Mail”1873. 11. 1号。

17) 拙稿「富岡製糸場のお雇いフランス人」(『千葉敬愛経済大学研究論集』第20号)。

18) 拙稿「陸軍省雇用のフランス人」(『仏蘭西学研究』第10号)。

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

横浜製鉄所雇いのフランス人明細表

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ウェット (Huet, Pierre)	鑪 鑿 頭 目	雇 慶応元.1.30より 無期限 継 3.1.8より2年 (横須賀製鉄所)	150ドル 150ドル	仏艦「セミラミ ス」号乗組員 3.11.8病死 (29歳)
マルタン Martin, Guillaume	警 査 掛	雇 慶応元.2.23～ 5.4.30解雇 (横須賀製鉄所)	60ドル 95ドル	仏艦「ケリエル」 号乗組員 4年33才 1872.6.5帰国
ドロートル, de Rotour	首 長	雇 慶応元.2.ーより 1年半	350ドル	
メーグル Maigre, Bambert	鑪 鑿 頭 目	雇 慶応元.5.25～ 5.2.24解雇 (1865.6.18～ 1872.4.1)	75ドル 100ドル (明治4年)	仏艦乗組員 4年32才 1872.4.2 帰国?
エチゴアン	職 工		80ドル	
タイヨール	職 工		75ドル	
レストラー	職 工		75ドル	
コナン	職 工		70ドル	
チェブアン	職 工		60ドル	
アンジャポ ール	職 工		60ドル	
セループ	医 師	雇 明元.7より月雇	33.33ドル	4年47才
プギー Pougny	医 師	雇 明元.8より 無期限	33.33ドル	3年40才 横浜仏病院 医師
ルッサン Roussin, André	首 長	慶応2.9ー雇入伺 雇 慶応2.12.30～ 3.1.4 (1867.2.4～ 1870.2.4)	300ドル	3.1.8満期 帰国 勲四等旭日小 綬章(29.3.9)

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
エムテール Emeter, Hypolite	鑄 造 職	雇 2.10.7~4.12.6 継 4.12.6~5.12.17 (1872.1.15~ 1873.1.15)	85ドル 100ドル	3年34才  1873.1.21 帰国
バリコー	首 長	雇 3.1.30~ 3.9.5	400ドル	3年45才
ブスケー	製 缶 職	雇 3.3.12より未定 (4年の表には なし)	90ドル	3年38才
ブーゾー Boudou	鑄 鑿 頭 目	雇 3.3.10~5.3.8 (1870.4.10~ 1872.4.15)	150ドル	3年34才
ダルビエ Darbier	首 長 工 場 長	雇 4.3.18~6.5.7 継 6.5.7~8.5.7	300ドル	4年36才 1871.5.6来日
デニヤー Deniaud	製 缶 職	雇 4.3.18~6.5.7 継 6.5.7~7.5.7	100ドル 110ドル	4年30才 1871.5.6来日
バルバンシ ョン Barbanchon, Emile A. le	鑄 鑿 頭 目	雇 5.1.8~9.5.19	150ドル	5年34才 1872.2.12来日 ? 1876.2.29帰国
バレール Barelle	鑄 鑿 職	雇 5.3.15より 試験中 期限未定	90ドル (7年) 100ドル	7年名簿に有

横須賀製鉄所雇いのフランス人明細表

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ヴェルニー Verny, François Léonce	首 長	雇 慶応元.7.12~ 8.12.31 (1865.9.1~ 1875.12.31) 9.3.9解雇 9.3.14帰国	833.33 ドル (年1万ド ル)	1837.12.2生  1866.6.8来日? 勲二等旭日重 光章 (10.1.23) 1908.5.2没



横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
メラング Mélingue, Louis	造船方・ 図 引 頭 製 図 工 長	雇 慶応元.9.13より 4 年 (1865.11.1～ 1869.11.1)	225ドル  250ドル (明治元)	1866.6.8来日? (妻同伴)  1869.12.26 帰国 (妻と子同伴)
レノウ Lygner	建 築 課 長	雇 慶応元.10.1より 4 年 (1865.11.18～ 1869.11.18)	400ドル	1866.3.12来日 慶応2.2.28 病死
メルシェ Mercier, Pierre Louis	会 計 課 長	雇 慶応元.10.1より 4 年 (1865.11.18～ 1869.11.18) 継 2.10.16～ 3.11.10 (1869.11.19～ 70.12.31)	270ドル  300ドル (慶応3 より)	1866.7.13来日 (妻同伴)  3 年39才 1870.12.25 帰国?
デニエール Deniel, Auguste Armand	船 工 職	雇 慶応元.10.8より 4 年 (1865.11.25～ 1869.11.25) 継 2.10.23～ 4.10.14 (1869.11.26～ .71.11.26)	60ドル  85ドル (慶応3) 120ドル	1866.10.2来日   3 年26才 1871.11.26 帰国?
サヴァティエ Savatier, Paul Amédée Ludovic	医 師	雇 慶応元.10.14 より4 年 (1865.12.1～ 1869.12.8) 8.12.31解約 9.1.12解雇	416.66 ドル (年5,000 ドル)	1830.10.19生  1866.7.13来日 (妻と娘同伴) 1876.1.18帰国 勲四等旭日小 綬章 (10.1.23) 1891.8.27没

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ゴートラン Gautlin, Ferdinand	工事(機械) 課長	雇 慶応元.10.21 より4年 (1865.12.8~ 1870.9.1) 慶応2.10.18~ 慶応3.5.13 (横浜製鉄所首長)	400ドル  450ドル	1866.7.13来日 (妻同伴)  3.1.17満期解雇 1870.2.22 帰国?
モンゴルフ イエ Mongolfier, Emile de	書 記  会 計 課 長	雇 慶応元.11.5 より4年 3.4一解雇 再雇 4.10.21~ 6.10.20 7.1.6満期解雇	90ドル 150ドル (慶応3) 250ドル	1866.6.8来日? 4年30才   1874.1.6帰国
デュモン Dumond, Jacques	泥工頭目  建築頭目	雇 慶応元.11.26 より4年 (1866.1.12~ 1870.1.12) 継 2.12.12~ 4.11.23 (1870.1.13~ 1871.1.13)	145ドル  160ドル (元年)  170ドル	1866.3.12来日   3年42才  1871.1.22帰国 ?
リッショーニ Liccioni, Antoine	運用方頭目  船具頭目	雇 慶応元.12.3より 4年 (1866.1.19~ 1870.1.19) 継 2.2.18~5.2.24 (1870.1.19~ 1872.4.1) 継 5.2.26~6.4.1 6.10一解雇	80ドル  150ドル	1866.6.8来日?  1870.5一時 帰国 1873.10.28 帰国  1874.3.21水死
バスチャン Bastien, Edmond Auguste	船 工  製 図 職  造家小頭 造家職工長	雇 慶応元.12.3より 4年 (1866.1.19~ 1870.1.19) 継 2.2.18より月雇 雇 4.12.一~5.7.一 (富岡製糸場) 雇 8.4.5より月雇 雇 8.12.1より無期限 (12年雇止) (工部省・営繕寮〔局〕)	75ドル   90ドル 125ドル  125円 150円	1839.6.27生  1866.3.12来日  4.12一大蔵省 嘱託  1888.9.9没

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ハレル Harel, Pierre	鑄造頭目	雇 慶応元.12.13 より4年 (1866.1.29~ 1870.1.29) 3.1.17満期解雇	150ドル 160ドル (明治2年)	1870.2.22帰国?
ボエル	舎 密 掛 精 密 師	雇 慶応元.12.16 より4年 (1866.2.1~ 1870.2.1)	100ドル 150ドル (明治元年)	1866.6.8来日?
ジョフレー Joffret, Jean Baptiste	製 図 職	雇 慶応元.12.16 より4年 (1866.2.1~ 1870.2.1) 継 2.1.2~3.12.13 (1870.2.2~ 1871.2.2) 4.9.15雇止	75ドル 125ドル	1866.7.13来日 3年34才 1871.10.29帰国 ?
ギルマン Guillemin, Eugène	鑄 鑿 頭 目	雇 慶応元.12.27 より4年 (1866.2.12~ 1870.2.15) 3.1.17満期解雇	130ドル 160ドル (明元年)	1866.7.13来日 (妻同伴) 1870.2.22帰国?
マンジュ Mange, Léostic Félix	機械頭目補 (機械小頭)	雇 慶応2.1.1 より4年 (1866.2.15~ 1870.2.15) 継 3.1.16~5.1.7 (1870.2.16~ 1872.2.15) 継 5.1.7~7.2.14 継 9.4.14~ 11.4.14	100ドル 150ドル 153ドル	1866.10.2来日 3年37才 1878.4.17帰国 (妻・娘同伴)
デビス Davis, Ferdinand Philippe	製 缶 頭 目	雇 慶応2.1.23より 4年 (1866.3.9~ 1870.3.9) 2.8.29病氣帰国	150ドル 160ドル (明2年)	1866.10.2来日 1869.10.3帰国

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
レオスティク Léostic, Gabriel	船工頭目	雇 慶応2.1.29 より4年 (1866.3.15～ 1870.3.15) 継 3.2.15～4.1.26 (1870.3.16～ 1871.3.16) 継 5.2.7～6.3.15 6.10.26病氣 依頼解雇	120ドル  165ドル	1866.10.2来日  3年36才  1873.10.28 帰国
ポン Pont, Jean François Marie	水 潜 職 (船工職)	雇 慶応2.1.29より 4年 (1866.3.15～ 1870.3.15) 継 3.2.15～4.1.26 (1870.3.16～ 1871.3.16)	60ドル  75ドル	1866.10.2来日  3年36才 1871.3.19帰国 ?
コルデネー Cordenner, Guillaume Marie	埴 隙 職	雇 慶応2.1.29より 4年 (1866.3.15～ 1870.3.15) 継 3.2.15～4.1.26 (1870.3.16～ 1871.3.16) 4.9.15雇止	60ドル  95ドル	1866.10.2来日  3年43才  1871.11.12帰国
ルエラ Leuérat, Jean	製 缶 職	雇 慶応2.2.4より 4年 (1866.3.20～ 1870.3.20)	90ドル  110ドル (明2年)	1866.10.2来日?  1870.3.20帰国 ?
スーデ Souder, Victor	製 缶 職	雇 慶応2.2.4より 4年 (1866.3.20～ 1870.3.20) 継 3.2.20～4.2.1 (1870.3.21～ 1871.3.21)	75ドル  85ドル	1866.10.2来日  3年26才

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
コンスタン タン Constantin, François Félix	製 缶 職	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1) 3.4.一疾病解雇	100ドル  105ドル (慶応3.)	1866.10.2来日
トロテル Troter, Maturin Joseph, le	鍊 鉄 頭 目	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1) 継 3.3.2～4.2.13 (1870.4.2～ 1871.4.2) 継 4.2.24～5.2.24 継 5.2.24～7.4.1	150ドル  165ドル	1866.11.9来日  3 年47才  1874.6.3帰国 (妻と子供同伴)
エリソン Hérison, Pierre Alphonse	製 綱 頭 目	雇 慶応2.2.16より ～? (1866.4.1～?) 雇 5.8.27より 3ヶ月月雇 7.9.28病死 (横浜外人墓地に 碑なし)	90ドル  95ドル (明元年)	1866.11.9来日  1869.7.一私用 帰国
ビラール Villard, Alfred	製 帆 頭 目	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1) 継 3.3.2～4.2.13 (1870.4.2～ 1871.4.2)	90ドル  120ドル	1866.11.9来日  3 年37才  3.11.9病死 (碑なし)
シャペー Chap(p)é, Michel	鑪 鑿 職	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1) 継 3.3.16～4.2.26 (1870.4.16～ 1871.4.15) 継 ?～5.1.24 継 5.1.24～6.4.1 6.1.25解雇	75ドル  95ドル  100ドル	1866.11.9来日 ?  3 年42才

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ペリコー Pellicot, Joséphe	泥 浚 工	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1) 継 満期後月雇なれ ど不詳	80ドル  90ドル (3年)	1866.10.2来日  3年43才 3年末の解雇 か？
クレノン Crénom, Julien	鑿 鑿 職	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1)	75ドル  100ドル (明2年)	1866.11.9来日 ？
サラニユ Salanu Jean François	鍊 鉄 職	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1)	75ドル  95ドル (明2年)	1866.11.9来日 ？
ミショー Michaud, Germain	鍊 鉄 職	雇 慶応2.2.16より 4 年 (1866.4.1～ 1870.4.1) 継 3.3.2～4.2.13 (1870.4.2～ 1871.4.2) 継 ?～5.2.24 継 5.2.24～6.4.1	75ドル  100ドル  100ドル	1866.11.9来日 ？  3年27才  1873.4.1帰国？
アंकティル Anquetil, Théodore	石 工 頭 目 (建築頭目)	雇 慶応2.3.1より 4 年 (1866.4.15～ 1870.4.15) 継 3.3.16～4.2.27 (1870.4.16～ 1871.4.16) 継 ?～5.2.8	75ドル  150ドル	1866.11.9来日 (妻と子3人 同伴)  3年40才 5.9.9病死 (横浜外人墓地 埋葬)
ユード Eudes, Victor	泥 工 頭 目	雇 慶応2.3.1より 4 年 (1866.4.15～ 1870.4.15)	75ドル  105ドル (明2年)	1866.11.9来日 ？

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ブラン (ブロン) Brun, François Joseph,le	鑄 造 工	雇 慶応2.3.1より 4 年 (1866.4.15～ 1870.4.15)	75ドル  100ドル (明2年)	1866.11.9来日 ?
ゲルドラン ガブリエル	整 飾 職	雇 慶応2.3.1より 4 年 (1866.4.15～ 1870.4.15)	75ドル  80ドル (慶応3)	1866.11.9来日  明元.3.24没
フロック Flock, Prosper	製 缶 職	雇 慶応2.3.1より 4 年 (1866.4.15～ 1870.4.15)	75ドル  80ドル (明3年)	1866.11.9来日
バザン Bazen, Hyppolite Antoine	鑄 鑿 職	雇 慶応2.3.1より ～? (1866.4.15～?) 2.1.3病氣療養 帰国	75ドル  85ドル (慶応3)	1866.11.9来日  1869.2.13帰国 ?
ギュポー (グリポー) Gupeau, Jérôme Joseph	鑄 造 工	雇 慶応2.3.1より ～? (1866.4.15～?) 明2.横浜製鉄所 雇	75ドル  80ドル (明元年)	1866.11.9来日 ?
コラ (コラン) Colas, Joseph Jean	製 缶 職	雇 慶応2.3.1より 4 年 (1866.4.15～ 1870.4.15) 継 3.3.16～4.2.27 (1870.4.16～ 1871.4.16)	75ドル  100ドル	1866.11.9来日 ?  3年31才 1871.4.16帰国 ?
ミッシェル Michel	模 型 職	雇 慶応2.3.1より ～? (1866.4.15～?) 雇 2.12.1～3.3.15 (横浜製鉄所) 継 5.8.2～7.9.4 7.10.25退職	75ドル  100ドル	1866.11.9来日 ?  3年34才  ルガール後任 7.10.27帰国

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ドレル Dorel	小 使	雇 慶応2.6.21より ～? (1866.8.1～?)	60ドル	定員外 3年中には雇 止
フローラン Florent, Louis Félix	建 築 課 長	雇 慶応2.7.23より 4 年 (1866.9.1～ 1870.9.1) 継 3.8.7～4.7.18 (1870.9.2～ 1871.9.2) 雇 4.9.19～6.10.31 継 6.11.1～7.4.14 (工部省製作寮)	400ドル    500円	1830.4.21生 1866.11.13 来日  1874.4.15帰国 勲四等旭日小 綬章 (26.10.30) 1900.8.24没
デスパーギュ	築 造 職 製 図 職	雇 慶応2.9.12仮雇 3.4.一解雇	130ドル 200ドル (明2年)	3年120ドル 水夫頭との 記録も有
アンジェリ ニー Angeline	泥 工 頭	雇 慶応3.1.16 (1867.2.20) 慶応3.8.9依願 解雇	55ドル  60ドル	1867.2.11来日
ルブーシェ Le Boucher, Paul	機 械 職	雇 慶応3.7.13 (1867.8.11) 慶応3.12.6依願 解雇	55ドル	
リュシャーニ Luciani	機 械 職	雇 元.3.24より 2 年 (1868.4.16～ 1870.4.16) 継 満期後月雇	55ドル  65ドル	1868.4.11来日  3年42才 3.10.26病死
イボリット (バザンの長 子)	鑪鑿職見習	雇 2.1.13より無期 (1869.2.23～?)	30ドル	1869.2.15より 40ドルとの記 録も有
サバティエ Savatier	火 夫 (機械職)	雇 2.1.3より無期 (1869.2.13～?) 1869.2.8来日?	55ドル (80ドル)	2年表は横浜雇 4.1.5弘明丸の 自室にて頓死 (29才)



横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
チボーディエ Thibaudier, Jules César Claude	副 首 長	雇 2.3.10より不詳 (2.4.2雇とも) 10.3.31雇止	600ドル	1868.8.8来日 3年31才 勲三等旭日中 綬章 (1877.4.15) 1877.5.2帰国
デュボア Dubois, Charles François	鑪 鑿 頭 目	雇 2.9.28より4年 (1869.11.1～ 1873.11.10) 継 6.11.10～8.1.15 9.1.15満期後 3ヶ月留任	150ドル 165ドル	2.10.7雇とも 3年41才  1876.10.10 帰国?
ジラルル Girard, Victor Louis	鑄 造 頭 目	雇 2.10.7より4年 (1869.11.10～ 1873.11.10) 7.2.16満期	150ドル 165ドル (5年)	3年40才  1874.2.17帰国
カピテーヌ Capitaine, Adrien Alexandre	鑪 鑿 職	雇 2.10.7～4.12.6 (1869.11.10～ 1872.1.15) 継 4.12.6～5.12.17 継 6.1.15～8.6.1	80ドル 85ドル 100ドル	3年31才 7年10月より 110ドル 1875.6.2帰国
プロボー Provost, Joseph Allain	船 工 頭 目	雇 2.10.7～4.12.6 (1869.11.10～ 1872.1.15) 継 4.12.6～5.12.17 継 6.1.15～10.3.1	120ドル 140ドル	3年29才  7年より150ドル 1877.5.13帰国
エベール Hébert	製 缶 職	雇 2.10.7～4.9.28 (1869.11.10～ 1871.11.10)	85ドル	3年33才
ケルマレック Kermarec	製 缶 頭 目	雇 2.10.7～4.12.6 (1869.11.10～ 1872.1.15) 継 4.12.6～5.12.17 6.1.15満期後 月雇	135ドル 150ドル	3年 31才  1873.6.18病氣 帰国

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ルガール Legall, Alexandre Aristide	模 型 職	雇 2.10.7~4.12.6 (1869.11.10~ 1872.1.15) 継 4.12.6~5.12.17	80ドル 100ドル	5.7.19病死
フランソワ François, Pierre Oscar	機 械 課 長  修 船 掛 長 機 械 長 語 学	雇 3.4.11より1年 (1870.5.11~ 1871.5.11) 継 4.4.12~6.5.1 継 6.5.1~10.5.1 雇 25.4.1~ 26.3.31 継 26.4.1より1年 毎の雇継で、大正 時代まで奉職 (陸軍省・士官・ 幼年学校)	150ドル 250ドル 350ドル 120円 150円	モンゴルフィエ の後任 3年30才 3.9.5横浜製 鉄所へ  29.4.1~ 33.3.31 海軍大学校兼 備 勲三等瑞宝章 (大4.1.17)
フホール	製 缶 職	雇 3.4.1…試験中雇 期間未定	65ドル	3年38才
ラペール	船 具 頭 目	雇 3.3.10より月雇	100ドル	3年34才
エベン (エバン) Even	鑄 造 職	雇 4.3.18より3年 (1871.5.7~ 1874.5.7) 6.1.24横浜製鉄 所雇	100ドル	1871.5.6来日 4年32才  1874.5.6帰国
フォートラー Fautrat, Emile Hippolite Eugène	製 図 職  製 図 頭 目	雇 4.6.12より3年 (1871.7.29~ 1874.7.29) 継 8.7.31~9.7.31 継 9.7.6~10.7.6 継 10.7.6より 5ヶ月	120ドル 150ドル	1871.7.27来日 ? 4年28才  1877.10.23 帰国
エルミット Hermet	損 隙 職	4.10.3潜水工事 中に死亡.詳細不明		1871.10.23 来日
モーリス Maurice, Vern(e)y	書 記	雇 4.10.23より未定 (1871.12.4~?) 9.3.9解雇	60ドル 70ドル (6年)	1871.12.4来日 4年25才 1876.4.19帰国

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
カイユ Caille, Jean Marie	建 築 頭 目  泥 工 頭 目	雇 4.12.4~6.1.13 (1872.1.13~ 1873.1.13) 継 6.1.13~8.1.13 継 8.1.13~9.1.13	150ドル	1872.1.13来日 (妻と子同伴)  5年41才 1876.4.11帰国
ジョワン Join, Marie Pierre	製 缶 職	雇 4.12.4~6.1.13 (1872.1.13~ 1873.1.13) 継 6.1.13~11.1.13	90ドル  100ドル	1872.1.13来日 5年25才  1878.1.15帰国
フローラン Florent, Vincent Clément	建 築 課 長  建 築 師 長	雇 4.12.24~7.2.1 (1872.2.2~ 1874.2.1) 雇 7.2.1~10.2.1 継 10.2.1~12.9.30 (工部省・製作寮)	350ドル  430円	1833.11.22生 1872.2.1来日 (妻と子同伴) 1879.10.14 帰国? 勲四等旭日小 綬章(29.3.9) 1908.1.2没
マイエ Mailhet, François Eugène	医 師  医 師  教 師  医 師  教 師	雇 4.12.23~ 5.10.30 (横須賀製鉄所) 雇 5.11.1~ 8.12.31 (富岡製糸場) 雇 7.10.26~ 8.10.26 (東京開成学校) 雇 8.11.1~ 11.10.31 13.4.30解雇 (生野銀山)	250ドル  250ドル  250円  300円	サヴァチエの 代理  7.5.15退職    1880.5.14帰国
ローラン Lourent, François	費 舎 教 師	雇 4.12.-~ 5.1.13 継 7.2.2より1年 7.12.31退職	150ドル	横浜在留の砲 兵下士
ボンビール Bon(ne)ville, Léopold	警 査 掛 (見廻役)	雇 5.4.30より1年 7.12.7満期 7.12.8帰国?	80ドル	仏軍艦の警吏 マルタン帰国 のため雇入 5年28才

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
キリヤン Quillien, François Marie	損 隙 職	雇 5.5.13～8.5.19 (1872.6.18～ 1875.5.19) 7.12.31 退職	80ドル	1872.6.17来日 ? 5年38才 1875.1.5帰国
ルヘルソン (Le Hérisson)	製 鋼 職	雇 5.8.27より 3ヶ月	400ドル	慶応2年2月 雇のエリソン と同一人物
ボシヤール	医 師	雇 5.11.3～6.1.26 (1872.12.3～ 1873.1.26)	250ドル	マイエー代理 サヴァチエ帰 国で解雇
ボルネ	医 師	雇 6.2.ーより月雇	33.33ドル	
ブルトニエ ール Bretonnière, Jean Paul	鑪 鑿 頭 目 (旋 盤 職)	雇 6.7.24～8.7.24 7.10.12病氣解雇	90ドル	1873.7.24来日 6年48才 1874.10.13 帰国
ダビス Davis, Ferdinand Philippe	船 工 頭 目	雇 6.7.24～8.7.24 10.11.25満期雇止	150ドル	1873.7.24来日 6年37才 1877.12.4帰国 (妻と娘同伴)
ベルジェー Berger (François)	製 缶 頭 目	雇 6.10.14～ 11.10.14 11.5.27解約	150ドル	1873.10.12来日 6年26才 1878.5.29帰国
サルダー Sarda, Paul	費 舎 機 械 学 教 師  理 数 学 教 師	雇 6.10.17～ 9.10.17 9.11.8満期 雇 10.6.12～ 10.12.25 (東京大学)	200ドル 325ドル (8年)  325円	6.10.16来日  6年26才  1905.4.2没
ファール Fabre	建 築 頭 目 (製 図 職)	雇 6.11.4～9.11.4 7.10.27當繕主任	150ドル	1873.11.3来日 1876.11.7帰国
ヴァニエー Vanier, Alexis Désiré	鍊 鉄 頭 目	雇 6.12.1～9.12.1 継 9.12.1より 1ヶ月	150ドル	1873.11.29 来日 7年38才 1877.1.3帰国

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
グランモン ターギュ Grandmon- tague, Edouard	鑄造頭目	雇 6.12.1~8.12.1 継 8.12.1より 3ヶ月	150ドル	1873.11.29 来日 7年45才 1876.3.14 帰国?
ジュウエット Jouet, E.	建築長	雇 7.5.1~10.5.1 継 10.5.1~12.5.1 継 12.5.1~13.5.1	300ドル 305円 330円	1874.5.1来日 (妻、義母、 娘同伴) 1880.5.14帰国
モノー Monot, (Yves Monat?)	船具職	雇 7.5.27~10.5.1	120ドル	リッジョーニ 代人 7年30才 仏軍艦乗組員
アルイス Alouis, Jean Simon Charles	整飾頭目	雇 7.5.28~9.5.28 継 9.5.28~11.5.27	100ドル 120ドル (8年)	1874.5.27来日 7年46才 1878.5.29帰国
ブロン (Brun)	警査掛見習	雇 7.6.18より? 雇 9.10.1~ 10.3.1	10ドル 33円	ボンビール代人 1877.3.13帰国
デュポン Dupont, Emile	伐木技師	雇 7.11.4~10.11.4 (8年5月副首長 兼務) (9.10.3 本科教 授) 10.9.2 満期解雇	400ドル 540ドル (8年)	1874.11.4来日 7年34才  1877.9.5帰国
ロッシェ Roché, Jean François	製帆職	雇 7.11.29~ 10.11.29 10.12.2横須賀立	120ドル	1874.11.29 来日 9年44才 1877.12.4帰国
カナール Canal, L.	費舎教師	雇 8.1.13~ 11.1.13 9.12.11教授 停止 10.1.13解約	120ドル  150ドル (8年)	1875.1.12来日 9年27才 1877.1.16帰国

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
アヴァール Havard, Jules Jean	塙 隙 頭 目	雇 8.1.13～11.1.13 8.10.1 費舎教師兼 (10.1.13解約と も?)	80ドル 100ドル (8年)	1875.1.12来日 9年27才  1878.1.15帰国
マリー Marie	模 型 頭 目	雇 8.1.13～11.1.13 8.10.1教師兼	80ドル 100ドル (8年)	1875.1.12来日  1878.1.15帰国
シャルル Charles, Alphonse Emile	鑄 鑿 職	雇 8.9.13～11.9.13 11.5.27解約	90ドル	1875.9.14来日 (妻同伴) 9年31才 1878.5.29帰国 (妻・子供2人 同伴)
ビダール Vidal, Jean Paul Isidore	医 師 病 院 医 師 医 師 医 師	雇 6.1.1～6.6.30 (林欽次) 雇 6.5.15～7.5.15 (鈴木長蔵) 雇 7.7.ー～8.12.ー (富岡製糸場) 雇 9.2.25～11.4.27 (海軍省)	150円  225円 250円	1872.8.20来日  7年44才 サヴァチエ代人 1878.5.1帰国
リュカ Lucas, Michel Etienne	鑄 鑿 頭 目	雇 9.3.18～11.3.18	150ドル	1876.3.18来日 9年33才 1878.3.26帰国
ニコラ Nicolas, Guillaume Maris	鑄 造 頭 目	雇 9.3.18～11.3.18	150ドル	1876.3.18来日 9年46才 1878.3.26帰国
ダグロン Dagron, Gustave Charles	軍 楽 教 師	雇 5.4.11～ 12.6.30 (1872.5.17～ 1879.6.30) (陸軍省) 11年海軍省兼備 (1ヶ月に10日出務) 16年解雇	150円  215円 (10年)	1872.5.17来日    1883.3.3帰国 (妻と子同伴)

横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師

氏 名	職 務	雇 入 期 間	給料(月)	摘 要
ベルタン Bertin, Louis Emile	造船大技監 海 軍 顧 問	雇 19.2.2~22.2.1 継 22.2.2~23.2.1 (海軍省・艦政局)	22,000円 (年俸)	1886.2.2来日 (妻と子3人 同伴) 1890.3.8帰国 勲一等旭日大 綬章 (37.9.14)
ゲードン Guedon	製 図 工 (2等技工)	雇 21.1.20~ 24.1.18 (横須賀鎮守府・ 艦政局)	200円	ベルタンの 紹介 1891.2.15帰国 (妻と子2人同 伴)
モデスト Modest	製 図 工 (3等技工)	雇 21.1.20~ 24.1.18 (横須賀鎮守府・ 艦政局)	150円	1891.2.1帰国

フランス人技師の年度毎人数表

	横 浜 製 鉄 所	横 須 賀 製 鉄 所	計
慶応2.10	16〔7〕	43	52
明治元.4	12〔9〕	42	45
〃 2.2	5	41	46
〃 3.5	6	37	43
〃 4.12	6	25	31
〃 7.9	5	26	31
〃 8.12	1	25	26
〃 9.5	1	24	25
〃 10.5	—	16	16
〃 11.4	—	6	6
〃 13.4	—	1	1

〔 〕 内は横須賀より横浜に出張していた者の数。